

第六回

二十三夜待ち

一月二十日をハツカシヨウガツというが、この日で正月行事はすべて終わるとされる。二十日過ぎに清兵衛日記でまず目に入ってくるのは「二十三夜待ち」である。二十三日の夜の月待ち行事で、月の満ち欠けで暦を定めていた時代、二十三日の月は真夜中になつてのぼる下弦の月であり、二十三夜待ち（講単位で宿に集まり、念仏を唱えたり、飲食をしながら月の出を待ち、月を拝んで解散する）が全国的に行われていた。

清兵衛宅の二十三夜待ち

この行事は地域で行う行事ではなく、家で行われる行事である。清兵衛宅では例年いろいろな人が集まっている。講（神仏を祭り、または参詣する同行者で組織する団体。例えば伊勢講・稻荷講・二十三夜講・大師講など）という単位ではなく、その時々で集まる人はさまざまであるが妻の実家や別家の人たち中心の場合が多い。人を呼ばなかった年は忌中や災害があった場合である。それでも家の者ばかりで行事食は食している。月が出ない雨の日であっても、二十三日は変更がなかった。

二十三日のもうひとつの行事

旧暦十一月二十三日近くに行われている「大師講」という大師を祀る行事がある。大師とは弘法大師（空海）をはじめ有名な大師を祀る行事である。伝承によると大師は

十一月二十三日の夜に村々をまわり、各家を訪れて祝福を与える神の姿と考えられている。この時期は太陽の力が最も衰え、少しずつ回復が期待される時期でもある。この時に神を迎えて行ったのが大師講である。正月という何かと気ぜわしい日が過ぎてほっとする時期にこの大師講と二十三夜待ちを絡めて行ったのではないだろうか。というのは大師講の供物には小豆粥・団子・大根などが一般的であるが、この行事食にはこれらの食材を組み込んだ献立になっているからである。例年ほとんど同じ献立である。

二十三日の夜のお集り

安政五（一八五八）年を取り上げてみよう。雨が降っていた日である。

「例年之通廿三夜待仕候

当年ハはなしや参り候 此礼 金壺朱ト酒切手壺升

香勘殿方〇〇〇半分到来

聞人 おやそ お友

とよ土産 州浜饅頭九到来」

聞く人の氏名が記述されているが全部で十八人、おやそ、お友は妻の実家の者、その他奉公人や丁稚、別家の人々、舞師匠、乳母など聞きに来た人々すべて名前が記されている。また記されていないが、清兵衛一家も加わった事だろう。はなし家を呼んで念仏を唱えるということではなく、落語を聞いたのではないだろうか。この礼にお金一朱と酒切手（酒の商品券）一升を渡している。土産持参の者もいる。その日の食事は

「茶飯 五升 湯豆腐四十丁

黒豆五合 葛

からし 水なしたし

黒豆入りの茶飯と湯豆腐、湯豆腐は大勢なので冷めないよう葛でとろみをつけたと考
えられる。薬味にはからしが添えられた。他に水菜のお浸し。全員に振る舞われた料理
である。豆腐は予約注文していたようだ。慶応四（一八六八）年の例ではあるが、

「湯豆腐 綿左へ四十五丁 詔申候得とも 釜工合ニ寄五十丁 拵参り候」

豆腐屋綿左へ四十五丁注文してあったが、釜の具合で五十丁こしらえたと持ってきた
と記している。一釜で五十丁作っていたと考えられる。慶応四年は不穏な年になり、身
内ばかりであったが豆腐屋の注文はそのままにした。豆腐屋に遠慮したのかもしれない。

「酒 卷すし 高野豆腐

くわひ 初肴 三月大根

みかん 飛竜頭

○ゆば

大平皿 椎茸 酢みそ こんにゃく

ゆりね

せり

二十三日夜の料理

酒の後に記している料理は酒を振る舞われた人だけのご馳走だったと考えられる。この日の料理はすべて精進料理であることから、大師講の行事と絡んでいると想像したがどうであろうか。大師講には大根料理が欠かせないものであるし、この二十三日月待ちにも例年必ず使っている。巻すしはない年もあり騒がしかった慶応四年には「当年時節柄ニ付 巻すし見合」とあり、今年は時節柄巻すしを見合わせるとのことで、巻すしはご馳走だったことがうかがえる。浅草のりが当時贅沢品だったのかもしれない。大平皿とは、大きな蓋つきの塗物の器で、料理は一緒盛りにして取り回しにされた。煮物であることが多く、ゆば、椎茸、ゆりね、せりと彩り豊かな料理が盛られている。煮物の他に、酔の物のこんにやく酢みそがあり、料理全体を引き締めていると思われる。例年ほぼ同じ献立であるが実に見事な行事食といえる。

二十三日夜の過ごし方

この日に念仏を唱えたことはどの年にも見られないが、先に取り上げたようにはなし家を呼んでいる。江戸時代の末には都市や地方で芸能が盛んになっていて、身近にいる親しみ楽しんでいたようである。行事に事寄せてお楽しみのお機会になっていたに違いない。

お月様に関して記しているのは慶応四年「当年東方雲なく月之出結構ニ而難有来候」

とあり「今年は東方面に雲もなくすばらしい月が出ており有り難い事だ」と記述している。毎年二十三日に人を呼ぶとは限らないとすでに記したが、嘉永五年には「例年之通廿三夜待ニ候得共 中陰中故不仕候 乍併家内斗」と中陰（人が亡くなってから四十九日以内）中なので行わない、しかしながら家の者だけで、とある。あるいは慶応四年には「月待仕候 当年動揺ニ付内うら斗」当年は世の中揺らいているので、内輪の者ばかりで、とあり別家の者など六名が記されている。明治に改元されたのはその十日ぐらい後の二月三日のことである。清兵衛日記には江戸時代末期特に世の中の動きや町お触れなども多く記され、京都の町が穏やかでなかったことがうかがえる。

現在、二十三夜月待行事は一般に行われていないようだが、当時は何かにつけ集まり、地域のコミュニケーションをうまく取っていたのかもしれない。

【参考文献】

- 福田アジオ・他『日本の年中行事事典』吉川弘文館 平成二十四年
佐藤健一郎・他『暦と行事の民俗誌』八坂書房 平成十三年
田中宣一・他『三省堂 年中行事事典』三省堂 平成三年